

図像学研究の課題

佐々木 弘美 (COE研究員・RA) SASAKI Hiromi

歴史学における絵画資料研究は、ここ数十年の間に多くの成果を挙げてきたが、現在ひとつの限界に突き当たっている。美術史家は鑑賞者の視点への回帰によって、この壁を打破しようとしているが、それだけでは絵画資料研究の壁を乗り越えることはできない。作者の内側から溢れ出る身体表現の痕跡である筆跡の意味を、十分に理解できなかったことが、これまでの図像学研究の限界になっていたからである。画家と歴史学者両方の視点を併せ持つ研究者がいなければ、いくら絵画資料を利用して、作者の意図を読み解くことはできないだろう。

また画家も、歴史学における図像学研究を積極的に論じたことはなく、ただ歴史学者の求めに応じて復元作業に関わってきただけである。たしかに、歴史に対する知識が皆無に等しい画家による解釈には、時代背景を無視したものが多く、歴史学者の参考にはならなかった。しかし、筆跡から制作過程を再現できる画家が解釈に参加しなかったことは、図像学研究にとって大きな不幸である。制作過程を正確に復元できず、作者の意図を知ることができないからだ。たとえ多くの情報があっても、気づく者がいなければ議論は豊かにならない。

現在の画家は、作者の身体表現の痕跡である筆跡から制作技法を再現できるため、過去と現在という時間的な隔たりがあったとしても、共感することができる。さらに作者は鑑賞者の視点を意識しながら制作したのであり、作者の制作意図を再現できれば、当時の鑑賞者の視点を復元することもできる。

もちろん現在の画家は、身体技法を復元できても作者本人ではない。そのため、画家の視点とはいっても、作者の視点と異なるという指摘もあるだろう。しかし、そのような指摘は重要なことを見落としている。現在の画家は作者本人ではないが、痕跡である筆跡から作者の身体表現としての技法を再現することができる。そのことで、画家は作者との間に主観性を築くことのできる画家集団の一員である。これが、画家と歴史学者の違いである。

さらに作者の視点を重視するとはいっても、鑑賞者の視点を否定するものでもない。作者は自らの意図を正確

に鑑賞者に伝えることを目指して試行錯誤するのであり、作者の意図と鑑賞者の視点は決して対立するものではないからだ。それぞれの時代にそれぞれの形式があるのも、鑑賞者に自らの意図を正確に伝えるためであり、形式と内容は決して対立するものではない。形式と内容が対立するのは、形式で表される内容を重視すべきところを、形式にとらわれるようになったときである。

当時の画家の意図を復元する上で最も重要なのは、絵画の構図である。絵画資料の構図は文字資料の物語性に相当し、画面に描かれている一つひとつの図像は、物語性である構図によって大きく意味を変える。絵画を効果的に見せるのが構図であり、そこに作者の意図だけではなく力量までも見ることができる。このような構図を理解できれば、作者の心性を復元できよう。しかも作者が鑑賞者を意識していることを知れば、そこから当時の鑑賞者の視点を回復できる。

わたしは、鎌倉期の浄土教系高僧伝絵巻『一遍聖絵』や織豊期の合戦図屏風『朝鮮軍陣図屏風』を具体例に取り上げて、鑑賞者に見られることを意識して描く作者の視点を、構図から再現した。これは、『絵巻物による日本常民生活絵引』に見られるような記号的解釈を乗り越える試みである。

絵画資料によって明らかになる歴史は、文字資料によって明らかになる歴史とは異なる。絵画は、観察したものを自分の中で消化して表現したものであり、写実的に描いたものも心象的形象といえる。そのため、絵画資料は描かれた時代の人びとの心象を表象した歴史的資料といえる。そのような意味で、絵画資料と文字資料は同等の価値を持つ歴史資料といえる。

さらに科学的方法の導入によって、当時の人びとが見たものを再現できる。歴史学者のなかには科学的方法に対して懐疑的な者も多いが、復元作業によって、当時の鑑賞者と現在の鑑賞者の視点は重ね合わされる。画家の参加と科学的方法の導入で、当時の作者の意図と鑑賞者の視点が復元され、過去と現在の間に主観性を築くこともできよう。